『 On-line みんなで法華経を学ぼう！ 』 vol.3

Jun.2022

── Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

（みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう）

『無量義経（むりょうぎきょう） 説法品（せっぽうほん） 第二』 （正 宗 分）

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華經の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 （法師品　二〇二頁 終五行）

○『其の習學せざる者は　此れを曉了すること能わじ』（方便品　八十二頁 四行）

○ 「習学」の３つのステップ 「聞解（もんげ） ・ 思惟（しゆい） ・ 修習（しゅしゅう）」

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 （法師品　二〇九頁 三行）

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 （『新釈法華三部経　第一巻』　P8・8行／P5・1行）

◇　◇　◇

＜徳行品の復習＞

- 徳をなぜ、ほめたたえるのか？ 一番の理由はその徳の尊さ・美しさを、心に強く焼きつけるためです。そして閉ざされていた胸が開け、**教えを受け入れる態勢ができるのです。いわば、教えの本番にはいる準備運動**というわけです。
- 他教の神々が法会に列座 ⇒「他教を排斥せず」。**仏教の「包容性」**を示す。
- **菩薩行とは⇒ 『自行と化他行』**の両方を行うこと。
- **《利供養・敬供養・行供養》 最高の供養は、「教えを実践する〈行供養〉」**。
- **《解脱知見》―** 自分が解脱していることをハッキリ認識していることです。どうしてこの境地までのぼって来られたかという経過をも見きわめていなければ、たくみに人を導くことはできません。～ （解脱知見は）菩薩の資格の一つなのです。
- **「恬安憺怕・無為無欲・静寂清澄・志玄虚漠」―** どんな境遇でも心が引っかからず安らか**《恬安》**。物事にこだわらず他人に対して求めることがない**《憺怕》**。自己中心に考えない**《無為》**。欲から離れ**《無欲》**。煩悩に惑わされない澄み切った心**《静寂清澄》**。奥深く微妙（みみょう）な境地**《志玄》**。広々と限りなく大きい心境**《虚漠》**。
- **『菩薩の教化法』⇒** 『微渧先ず墮ちて以て欲塵を淹し、涅槃の門を開き解脱の風を扇いで、世の悩熱を除き法の清涼を致す』 （二頁 終三行）

・『大乘の事業を扶蔬増長して～無量の大悲、苦の衆生を救わしむ』　（三頁二行）
・**《十二因縁》**は「肉体の生成**(外縁起)**」と「心の成長**(内縁起)**」に十二段階の法則があるという教え。⇒　根本の**〈無智〉(無明)**を捨てて、心を**〈真理〉**のレールに乗せれば、これから先の人生はじつに明るく、安らかになる。
・仏という最高の境地も、じつは、（一人の人間として）さまざまな修行の結果達せられたことが明らかにされた。⇒　『衆生善業の因縁より出でたり』　（六頁二行）
・『是れ諸の衆生の眞善知識、是れ諸の衆生の大良福田、是れ諸の衆生の請せざるの師、是れ諸の衆生の安穏の樂處・救處・護處・大依止處なり』　（三頁四行）
・**【仏の徳相　三十二相】**　『表裏映徹して淨くして垢なし　濁水も染むるなく塵を受けず　是の如き等の相三十二あり』　（六頁 終四行）
・**《讃仏偈》**（五頁 終五行～）　――　『頭目髄脳悉く人に施せり**《布施》**』、『清淨の禁を奉持して**《持戒》**』、『終に瞋りたまわず**《忍辱》**』、『身を挫けども倦惰したまわず**《精進》**』、『常に禪にあり**《禅定》**』、『智慧深く衆生の根に入りたまえり**《智慧》**』
⟹　**『六波羅蜜』**の実践を仏は貫徹された。**（開祖さまも同じく）**
・『勤め難きを勤めたまえるに歸依したてまつる』　（八頁 終行）

◇　◇　◇

＜説法品のあらすじ＞

【九頁 一行】　**大荘厳菩薩(だいしょうごんぼさつ)**と八万の菩薩たちが世尊の大徳を讃（たた）えたあと、世尊に次のように質問をしました。
【九頁 二行】「世尊よ。私ども一同は、仏さまにぜひお伺いをしたいことがございます。如何でしょうか。お聞き下さり、お教えいただけますでしょうか？」
【九頁 四行】　すると**釈尊**は八万の菩薩たちにお答えになりました。

【釈尊がご自身の入滅を予言】――

【九頁 四行】　「善（よ）いかな、善いかな。大事な時に質問をしてくれました。なんでも質問をしなさい。／（『如來久しからずして當（まさ）に般涅槃（はつねはん）すべし』）　じつは、私はもう少しでこの世を去ろうとしています。私が亡くなった後、疑問が残ることがないよう、何でも聞きなさい。何でも伝えましょう」

【大荘厳菩薩と釈尊の問答　／　疾く悟りを得る法とは】――

【九頁 七行】　すると**大荘厳菩薩**と八万の菩薩たちは、声をそろえて申し上げました。
「世尊よ。私ども菩薩が、まわり道をせず『真っすぐ』に最高無上の悟りを得るためには、どんな教えを修行したら良いのでしょうか？」
【十頁 一行】　**釈尊**はお答えになりました。「みなさん。ここに一つの教えがあります。これこそが、菩薩の皆さんを『真っすぐ』に最高無上の悟りへと導くものです。この教えを学び実践するならば、ただちに『仏の悟り』を得るでしょう」
【十頁 三行】　**大荘厳菩薩**は、釈尊のことばを待ちきれずに直ぐにお尋ねします。
「世尊。それは何という教えですか？　その教えの内容とはどのようなものですか？ そして、どのように修行したらよろしいのでしょうか？」

【無量義経の重要箇所 ／ この世のありよう】――

【十頁 四行】 **釈尊**は即座に答えられます。

「善男子よ。それは**『無量義』という教え**です。菩薩たちが、この『無量義』の教えを修めようと望むならば、まず次のことを見極めなければなりません。／（『應當（まさ）に一切諸法は自（おのずか）ら本（ほん）・來（らい）・今（こん）、性相空寂（しょうそうくうじゃく）にして』）それは、**過去・現在・未来におけるこの世のあらゆるものごとの根源の相(すがた)は、全ては『ただ一つ』であり、『一切が平等』であるというものです。しかも、あらゆるものは生成発展し、『大きな調和』を保っている―― このことを見極めることが必要です。** しかし人々は、この世の現象、目に見える出来事・事物は、大きいとか小さい、生ずるとか滅する、止まっているとか動いている等、**『違い・変化・差別』**があるように見えます。しかし、じつはそうではないのです。この世のあらゆる現象・事物はその根本においては、差別も区別もない**『ただ一つ・ひといろ』**のものなのです。／（『猶（な）お虚空（こくう）の如く二法あることなしと觀察すべし』） それはちょうど虚空（大気・空気）というものが、どこをとっても同じであるのと同様で、すべてのものは、二つの違いはなく、ただ**『ひといろ』**のもので、しかも**『生々滌剌・せいせい はつらつ』**としているものだということを、菩薩は見極めていなければなりません」

【真理を知らない凡夫の愚かさ】――

【十頁 八行】（『而（しか）るに諸（もろもろ）の衆生、虚妄（こもう）に是（これ）は此（し）是は彼（ひ）是は得（とく）是は失と横計（おうけい）して、不善の念を起し』） 「ところが人々は、目の前に現われた現象を見て、自分にとっての善悪、損得、好き嫌い等で物事を判断し、価値付けをして、自分中心の身勝手な計算をしてしまいます。その結果、『不善の心』を起こして／（『衆（もろもろ）の惡業を造って六趣に輪廻（りんね）し～ 無量億劫（おっこう）自（みずか）ら出（い）ずること能(あた)わず』） 結局は様々な悪い行いをしてしまい、そのためにいつも**『六道』**をグルグル回って、数々の苦を受け続けることになり、結果的にいつまでたっても、その**苦しみの境界から抜け出せない**でいます」

【凡夫を救うには】――

【十頁 終三行】（『菩薩摩訶薩、是（かく）の如く諦（あきら）かに觀じて』） 「菩薩よ。このように衆生は、苦しみの中から抜け切れないでいるということをはっきりと見極めて、だからこそ衆生に対して／（『憐愍（れんみん）の心を生じ大慈悲を發（おこ）して將（まさ）に救拔（くばつ）せんと欲し、又復（またまた）深く一切の諸法に入（い）れ』） **『あわれみの心』を起こし、大きな慈悲心を奮(ふる)い立たせて、衆生を『根こそぎ、完全に救い出す』という決意をしなければなりません。**そしてその尊い目的を達成させるためには、どうしても一切の物事の『実相』というものを、より深く見極めていることが必要なのです」

【実相を見極める ／ 四相(しそう)について】――

【十頁 終行】「この『実相』を深く見極めるということは、即ち、この世の全てのものは例外なく、**『生・住・異・滅』**の存在であると知ることです。／（『法の相（そう）是（かく）の如くして是（かく）の如き法を生ず』） つまり全ては、今までなかった現象・事物が『現象と

して生じ』**《生》**、／（『是（かく）の如き法を住す』） その現象・事物が『そのままの状態で、しばらくは維持し』**《住》**、／（『是（かく）の如き法を異す』） そしてその現象・事物が、必ず『異なった形に変化し』**《異》**、／（『是（かく）の如き法を滅す』） 結局は、その現象・事物は、必ず『消滅する』のです。**《滅》**。／（『菩薩是（かく）の如く四相（しそう）の始末を觀察して』） 菩薩は、全ての現象・事物は、例外なくこの**『生・住・異・滅』**の法則に従っている、ということを知らなければなりません」

【十一頁 四行】（『一切の諸法は念念（ねんねん）に住せず 新新（しんしん）に生滅すと觀じ、復（また）即時（そくじ）に生・住・異・滅すと觀ぜよ』）「ですから菩薩は、全ての現象・事物は、一刻も元のままでとどまっているものはなく、一瞬一瞬、生じ、滅する**『生・住・異・滅』**という**『四相(しそう)の始末(しまつ)』**の変化の法則が、瞬間、瞬時にはたらいているということを、しっかりと悟っていなければなりません」

【十一頁 六行】（『衆生の諸（もろもろ）の根性欲（こんじょうよく）に入（い）る。性欲（しょうよく）無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に義も亦（また）無量なり』） 「衆生をみると、衆生の**『機根・性質・欲望（根性欲・こんじょうよく）』**が、千差万別にはたらいていることが分かります。ですから人々に法を説く時、当然、法の説き方も『千差万別』にならざるを得なくなります。仏の説法は様々な『根性欲（こんじょうよく）』の衆生を対象に行うのですから、当然その教えの内容は数限りなくあることになります。

【無量義経の中心 ／ 無量義とは一法より生ず】――

【十一頁 七行】（『無量義とは一法より生ず。其（そ）の一法とは即（すなわ）ち無相なり。是（かく）の如き無相は相なく、相ならず、相ならずして相なきを名（なづ）けて實相（じっそう）とす』） しかしその数々の教えは、もとを正せば、もともとは**『ただ一つの真理(一法)』から生ずるもの**なのです。『真理・法』とは、特定の相（すがた）がないもので、一切の差別を作らず、一切が平等であります。これを名付けて**『実相』**といいます」

【真理に沿った『慈悲と智慧』の行いは、必ず、救い、救われが実現する】――

【十一頁 終四行】（『是（かく）の如き眞實の相に安住し已（おわ）って發（ほっ）する所の慈悲、明諦（みょうたい）にして虚（むな）しからず』）「菩薩よ。真実の教え（**『すべてはー つ』**。必ず**『生・住・異・滅』**するという真実）に基づいて、そこから発した**『慈悲と智慧のはたらき』**は、**必ず立派な結果となって現われます。ムダには終わりません。**すなわち、相手がそのままの境遇で**苦から根こそぎ救われ、生きる喜びを得るという現象となって現われる**のです」

【十一頁 終二行】「菩薩よ。いま説いた教え（**『すべてはー つ』**、**『生・住・異・滅』**の教え）をしっかりと把握して、一人ひとりの機根・性質・欲望（根性欲）に応じて法を説き分けるならば、それだけであなたは必ず最高無上の悟りに達することができましょう。

【無量義の教えを実践する者が得られる功徳】――

【十二頁 一行】（『善男子、是（かく）の如き甚深（じんじん）無上大乘無量義經は、文理眞正（もんりしんしょう）に尊（そん）にして過上（かじょう）なし） この奥深い『無量義の教え』は最高の教えであり、これよりも正しい、尊い教えは他にはありません。／（『三世の諸佛の共に守護したもう所なり』） ですからこの教えを受持する者は、過去・現在・未来においてすべての**諸**

仏が必ず守護してくださるのです」

【十二頁 二行】（『衆魔群道（しゅまぐんどう）、～　一切の邪見（じゃけん）生死（しょうじ）に壞敗（えはい）せられず』）「菩薩よ。**この教えを実践している限り、その人の精進に対して妨害・邪魔・邪見が入り込む隙(すき)はありません。またその人が、どんな『変化』に遭遇しても、くじけて敗れることなどありません。**ですから、菩薩の皆さんが『悟り』を得ようと思うならば、必ずこの『無量義の教え』を修めなければなりません」

【大荘厳菩薩の質問　／　今の教えと過去の教えとの違いは？】――

【十二頁 六行】　すると**大荘厳菩薩**は、再び釈尊に向かって申し上げました。

「世尊よ。世尊の教えは大変奥深いものです。しかし衆生にとっては、その奥深い教えを正しく理解することは容易ではありません。私ども菩薩はこの教えに疑問や難しさを感じませんが、しかし衆生にとっては、疑問、難しさ、迷いを覚えることもあるでしょう。どうかそういう人たちのために、重ねてお尋ねいたします」

大荘厳菩薩は質問を続けます。

【十二頁 終四行】「世尊は成道されてから４０数年経（た）ちました。そして**『生・住・異・滅』**の教えや、全てのものごとは**『空』**であるということ、また常に変化するという**『無常』**の教え、孤立して存在するものはないという**『無我』**の教え、そして、すべての存在の本質は、大きいとか小さいなどの差別や区別はなく、本来、**『平等で調和』**しているということをお教えくださいました。その結果、教えを伺った者たちは、『心暖まる境地』から、『仏法がこの世の教えの中で第一であると認識する境地』、『煩悩にとらわれなくなる境地』、『菩提心を起す境地』、『大雲（だいうん）が大空をおおうように、この世あらゆる人々を平等におおい、救う境地』等々、その人の信仰の境地も高まってまいりました」

【十三頁 二行】（『往日（むかし）説きたもう所の諸法の義と今説きたもう所と、何等（なんら）の異（ことな）ることあれば、』）　しかし世尊は何故、以前に説いた教えと、今、説く教えに違いがあり、『無量義の教えさえ実践すれば、必ず、直ぐに無上の悟りが得られる』とおっしゃるのでしょうか？（昔の教えではダメなのでしょうか？）　どうか私どもを可哀相だとお考えくださり、現世のみならず未来の人々のために、疑問が少しでも残ることがないようにその真意をお教えください」

【（大荘厳菩薩の質問に対する）釈尊の答え】――

【十三頁 六行】　すると**釈尊**は大荘厳菩薩にお答えになりました。

「よろしい。じつに良い質問です。この大乗の教えについて、大事なことをよくぞ聞いてくれました。あなたの質問は大きな功徳を生むもので、人間界・天上界の人びとが、迷いから救われるものとなります。まさに**『真の大慈悲』**です。／（『眞實（しんじつ）にして虚（むな）しからず』）　そして真の大慈悲であるからこそ、必ず真実のはたらきがあり、実際の成果・効果となって現われます。ムダではありません。その功徳によって、あなたは必ず真っすぐに仏の境地へと至るでしょう。そして現在のみならず未来の多くの人々を、無上の悟りへと導くことができましょう」

【十三頁 終二行】（『我先に道場菩提樹下に端坐（たんざ）すること六年にして、』） 「善男子よ。私はかつてブッタガヤの菩提樹下で６年間端座して、ついに最高無上の悟りを得ることがでました。／（『佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに、宣説（せんぜつ）すべからず』） そして悟りを開いた仏眼でこの世の出来事を見ると、その時の段階の衆生に対して、悟りをそのまま説くことは、かえって良くないという結論に達しました。／（『諸（もろもろ）の衆生の性欲（しょうよく）不同なることを知れり。性欲不同なれば種種（しゅじゅ）に法を説きき。種種に法を説くこと方便力を以てす。』） なぜなら、人々の**『機根・性質・欲望(根性欲)』**が様々であるために、その違いにしたがって教えを説き分ける必要があったためです。つまり衆生の**『根性欲』**の違いに合わせて、法を説いてきたのです。

【四十余年 未顕真実】――

【十四頁 三行】（『四十餘年（よねん）には未（いま）だ眞實を顯（あらわ）さず』） そのために、どうしても真実のすべてを『打ち明ける』ことは出来ず、とうとうこの４０年間、究極の真理を解き明かすことはありませんでした。／（『疾（と）く無上菩提を成ずることを得ず』）「したがって、全ての人びとが真っすぐに、無上の悟りに達するというわけには行かなかったのであります」

【『法と水のお話(譬え)』】――

【十四頁 四行】（『善男子、法は譬（たと）えば水の能（よ）く垢穢（くえ）を洗うに』）「善男子よ、例えば水には井戸や池、大きな川や谷川、用水路や海など様々な水があります。それぞれは違う水です。しかし違う水ではあっても、どの水も『汚れを洗い落とす』という意味では『同じ水』ですが、井戸と池は違います。また谷川や用水路、海も違います。これと同じで如来は自由自在に教えを説きますが、説く教えの現われ方はさまざまです。つまり仏の教えは、人々の苦しみを取り除くという点では『同じ』であり『違いはない』はありませんが、／（『初・中・後の説、文辭（もんじ）一なりと雖（いえど）も而（しか）も義（ぎ）各（かく）異（い）なり。』） 私が説いた初期の教え、中期の教え、そして後期の教えは、『同じ』ようのようでも、『違い』があるのです。すべての教えが同一だとは言えません。『内容の深さ』において違いがあるのです」

【釈尊の答え ／ 今の教えと過去の教えとの違いについて】――

【十五頁 一行】「善男子よ、鹿野苑で私が初めて法を説いた時、私は五比丘のために**『四諦』**を説きました。この時もこの世の実相は**『空寂』**であると説きました。また中期以降、比丘や菩薩に**『十二因縁』**、**『六波羅蜜』**を説きましたが、／（『亦（また）諸法は本（もと）より 來（このかた）空寂（くうじゃく）なり』） その時、同じくこの世の実相は**『空寂』**であると説きました。そして今、ここで『無量義経』を説くにあたっても、同様にこの世の実相は**『空寂』(ただ一つ。生成発展している)**であると説いています」

【十五頁 七行】（『善男子、是（こ）の故（ゆえ）に初説・中説・後説、文辭（もんじ）是（こ）れ一なれども而（しか）も義（ぎ）別（べつ）異（い）なり。義（ぎ）異なるが故に衆生の解（げ）異なり。解異なるが故に得法（とくほう）・得果（とっか）・得道（とくどう）亦（また）異なり』） 「しかし善男子よ。初期、中期、そして後期である今においても、私が説く『言葉は同じ』ではありますが、その内容

には大きな『開き』があります。内容に『開き』があるため、それを受け止める人々の『受け取り方』にも違いが生じます。ですから、教えを聞いて得た『悟り』にも、当然『違い』が生まれてくるのです」

【十五頁 終四行】「善男子よ。私は初期において声聞の境地を求める者に**【四諦】**を説き、中期において縁覚の境地を求める者に**【十二因縁】**を説いてきました。それでも多くの人が菩提心を起し、なかには煩悩の迷いを捨て切る声聞の境地に達した者もいました。そして様々な大乗の教えを説いて、**『歴劫修行・りゃっこうしゅぎょう』（生まれ変わり死に変わりして修行を続けていくこと）**の大切さを示しましたが、これによって多くの比丘たちや、万億の人間界・天界の人びとは、それぞれが『声聞』や『縁覚』の境地、または『縁起の法則』を身につけることができたのでした」

【十六頁 五行】「私はこれまで変わることなく**【苦・空・無常・無我】**を説き、この世は生ずることも滅することはなく／（『一相（いっそう）・無相・法相（ほっそう）・法性』）**【一相・いっそう】**といって真理の根本は『ただ一つ』であり、**【無相・むそう】**という『差別のない相（すがた）』で、『現象に現われる相（すがた）・性質』、つまり**【法相・ほっそう/法性・ほっしょう】**は／（『不來（ふらい）・不去（ふこ）なり』）「来る」ことも「去る」こともない**『すべてはーつ』**であると説いてきました。そして目の前の物事・現象を、**【生・住・異・滅】**という『変化』に心を惑わせ、迷ってはならないと説いてきました」

【仏の現われは自由自在　／　仏は様々な身、はたらき・形式で人を導く】――

【十六頁 終三行】（『一切の諸佛は二言（にごん）あることなく』）「善男子よ。一切の諸仏が説く『真理』は、二つはありません。ただ一つだけです。しかし、その『真理』を多くの人々に説くためには、仏は様々な説き方、現わし方をするのです。／（『一一（いちいち）の身（み）の中に又（また）若干（そこばく）百千萬億那由他（なゆた）阿僧祇（あそうぎ）恒河沙（ごうがしゃ）種々（しゅじゅ）の類形（るいぎょう）を示し』）ですから**『仏の本体はただ一つですが、その一つの身が無数の身に変わり、無数のはたらきという〈変化〉として現れる』**のです。

【十七頁 二行】（『二乘の知る所に非ず～ 唯（ただ）佛と佛のみ乃（いま）し能（よ）く究了（くりょう）したまえり』）このことは、声聞や縁覚の境地の人には理解することができません。いや、たとえ菩薩のなかの最高の境地の菩薩であっても、このことは分からないでしょう。ただ仏だけが本当に知り得るものです」

【無量義の教えを実践し広める者が得られる功徳】――

【十七頁 三行】（『善男子、是（こ）の故（ゆえ）に我（われ）説く、微妙甚深（みみょうじんじん）無上大乘無量義經は、文理（もんり）眞正（しんしょう）なり、尊にして過上なし』）「善男子よ。この尊い『無量義の教え』は、その内容は真実であり、正しく、この上なく尊いものです。これ以上の教えは他にはありません。ですからこの教えを実践し、法を広める者は、／（『三世の諸仏の共に守護したもう所』）**過去・現在・未来の全ての諸仏から守護される**のです。／（『一切の邪見生死（しょうじ）に壞敗（えはい）せられずと』）そして邪魔者から妨害され、よこしまな見方・考え方に惑うことはなく、人生のどんな**『変化』**に出会っても、くじけたり、打ち負かされることなどありません」

【無量義経が説かれたことによって、宇宙全体が感動】――

【十七頁 八行】 （『是（ここ）に三千大千世界六種に震動し』） 釈尊がこのようにお説きになりますと、世界中は感動のあまりに打ち震い、天から美しい花々が降ってきました。そして様々な香（かぐわ）しい香りや、価（あたい）もつけられない数々の貴重な宝が降（ふ）り注（そそ）がれ、／（『佛及び諸（もろもろ）の菩薩・聲聞（しょうもん）・大衆（だいしゅ）に供養す』） 釈尊のみならず、その教えを聞く菩薩や一般の人々にも注がれて供養されました。そして東方の世界で同じような奇瑞（きずい）が起こり、そればかりか十方世界の全てでも同じように仏と菩薩、人々が供養されるのでありました。

【無量義経を得た者の利益と歓喜、そして決意】――

【十八頁 四行】（『菩薩摩訶薩は無量義三昧を得（え）』） すると、聴聞（ちょうもん）している多くの菩薩たちは、無量義の教えに集中する禅定の境地**（『無量義三昧』）**を得ました。そして、悪をとどめ、善を行う無限の力を得て、三世の諸仏が説き続けて来た『無量義の教え』を受け継いで、それを説き広めることができるようになりました。

【十八頁 六行】また、この会座（えざ）にいる大比丘をはじめ諸々の鬼神（きじん）、国王、家臣（かしん）たちなど全ての人は素晴らしい信仰の高まりを得ることができ、／（『皆能（よ）く隨順（ずいじゅん）して～ 阿耨多羅三藐三菩提の心を發（おこ）しき』）仏の教えに従い、無上の悟りを得るために、しっかり精進する決意を固めたのでありました。

◇　◇　◇

この品は、～　仏陀の説法について述べられています。仏陀は、悟りを得られてから、こういう目的で、こういう順序によって法をお説きになった、その法というのは、いろいろさまざまに説かれてきたけれども、根本の真理の法は**「ただ一つ」**である。その一つの法から、無量の（数かぎりない）法が生まれるのである――　ということを説かれたのが、この章であります。　（P225・1 行／P159・1 行）

『菩薩、無量義を修学することを得んと欲せば、應當（まさ）に一切諸法は自（おのずか）ら本（ほん）・來（らい）・今（こん）、性相空寂（しょうそうくうじゃく）にして無大・無小・無生・無滅・非住・非動・不進・不退、猶（な）お虚空（こくう）の如く二法（にほう）あることなしと觀察すべし』　（十頁 五行）

法（ほう）　（P232・終 4 行／P165・終 5 行）

第一に、**〈ものごと〉**。「諸法実相」とか「諸法無我」という場合の「法」。
第二に、**〈真理〉**。
第三に、**〈仏教の教え〉**という意味。真理によって、正しく、その時々に応じて説かれた教え。
第四に、**〈善の実践〉**。自分自身のためだけでなく他の人や社会と調和して、よりよい方向にいこうとする倫理や道徳にかなった〈善いことの実践〉という意味。

性相空寂（しょうそうくうじゃく）

(P235・2行／P167・5行)

《性相・しょうそう》 「性」とは性質。「相」とはその性質が表に現れた相（すがた）。

《空・くう》とは、すべてのものごとは「縁起の法則」によって存在しているのであって、そのことから、すべてのものごとはその本質においては、平等であるという意味にもなります。この**「空とは平等である」**ということが、仏教としてもっとも大事な意味なのです。～

《寂・じゃく》とは、「大調和した状態」です。～ 全てのものが**生々発展**しながらも、大きく調和して、争いや摩擦がないために「寂・しずか」であるという状態を、この字から感じとらなければなりません。**〈寂光土〉**も、～ すべてが**生々溌剌（せいせいはつらつ）として活動しながら、しかも大きな調和を保っている理想の状態**をいうのです。～

変化するものごとにとらわれていては、いつまでたっても大安心を得ることはできない、ということです。そこで、**変化を超越した立場に立って**ものごとを見る、という**〈寂〉**の立場が必要になるのです。～

それは『虚空の如く二法（二種類の存在）あることなし』で、ちょうど我々を取り巻いている虚空が～ **「ただ ひといろ」**であるようなものだというわけです。

《思惟（しゆい）のひととき ①》

『一切諸法は自ら本・來・今、性相空寂にして』（この世のすべての物事のありようは「一切が平等」、「ただひとつ」、「ひといろ」である）と釈尊は説かれます。
―― このことをあなたは、どう受け止めますか？
特に、この「一切が平等」、「ただひとつ」という『空・くう』の意味を、もう一度かみ締めてみましょう。

『虚妄（こもう）に、是（これ）は此（し）是（これ）は彼（ひ）、是（これ）は得（とく）是（これ）は失（しつ）と横計（おうけい）して、不善の念を起し衆（もろもろ）の悪業を造って六趣（ろくしゅ）に輪廻（りんね）し、諸（もろもろ）の苦毒（くどく）を受けて、無量億劫自（みずか）ら出（い）ずること能（あた）わず』　（十頁 八行）

※ 価値観の変遷（二元論的価値観）と「苦」　（二項対立 二分法）

《快⇔不快》➡《好⇔嫌》➡《得（利）⇔損（害）》➡《善⇔悪》 は「苦」とペア。
⟹ **《空（一体感）》** は「苦」から解放される。

《思惟（しゆい）のひととき ②》

『虚妄に、是は此是は彼、是は得是は失と横計して、不善の念を起し衆の悪業を造って』の経文を、 ―― 自分にあてはめて振り返ってみましょう。

六趣（六道）

(P240・1行／P171・1行)

《地　獄・じごく》「苦しみばかりがある境界」

心が「怒り」で占領され～ 全てのものが「敵」に見える。その苦しみは、心ばかりでなく肉体をも責（せ）め、さいなみます。～ 「怒り」は、大抵の場合「習慣性」を持ち～ 人間の心の在り方としては「最低」の状態。（「地」は最低、「獄」は拘束の意味）

⇨ 【**カッカ**している状態】

《餓　鬼・がき》「常に飢えと渇きを覚え、その満足を追ってあえぎ続けるが、決して満足することがないという境界」。

貪りと欲張る心が限りなく起こってくる状態。～ まだ欲しい、まだ欲しいと留まることがないのです。～満足するということがなく、いつも心の中は不平不満。

⇨ 【**ガツガツ**している状態】

《畜　生・ちくしょう》「人間以外の動物の境界」

智慧が全然ない動物の状態。～ ものごとの道理ということが解らないために、ただもう本能の命ずるままに、前後の考えもなく（前後の見境・みさかいもなく）やりたいことをやる状態。いつも愚痴を言う。 ⇨ 【**ブウブウ**不平を言う状態】

《修　羅・しゅら》「いつも戦いばかりを続けている凄惨な境界」

何事も自分本位に、自分の都合のいいように考える心です。～ 利己心と利己心が醜（みに）くい争いをしている状態。利己的で、常に対立している。

⇨ 【**イライラ**している状態】

―― 以上の《地獄・餓鬼・畜生・修羅》を『**四悪趣・しあくしゅ**』という ――

《人　間・にんげん》「普通の人間の境界／娑婆」

以上の四つの心をある程度持っていて、良心によって程々（ほどほど）に抑え、極端に突っ走らせることのない状態。「平正・びょうじょう」ともいう。反省懺悔できる心を持つ。しかしいつでも《地獄・餓鬼・畜生・修羅》の『**四悪趣・しあくしゅ**』に陥る可能性がある。⇨ 【**フラフラ**している状態】

《天　上・てんじょう》「苦しみがなく、喜びに満ちた境界」

歓喜の世界。肉体や感情の喜び、つまり迷いの上に築かれた喜びですから、何かいやなことが起これば、すぐに地獄道へでも修羅道へでも真っ逆さまに落ちる可能性のある、ほんの仮りの喜びに包まれている歓喜。 ⇨ 【**ルンルン**の状態】

どうすれば六道の輪廻(りんね)を解脱(げだつ)することができるのかといえば、**よい教えを聞き、心を清らかにし、行いを正しくするほかはありません。**そうして、正しい修行を続けていけば、六道からすっかり離れきった仏界に生ずることができるのです。そのことを**〈出離・しゅつり〉**といいます。

(P241・終3行／P172・4行)

※ 「人間界」からのみ、「四聖(界)・ししょう、しせい」へ行けない。

（「四聖」とは、声聞、縁覚、菩薩、仏）

《思惟のひととき ③》

凡夫は、「六道」を輪廻(りんね)していると、釈尊は説いています。
――「地獄・餓鬼・畜生…（カッカ・ガツガツ・イライラ・ブウブウ・フラフラ…）」。
日ごろのあなたはどうでしょうか？ 「六道」の輪廻を解脱（げだつ）するには、「よい教えを聞き、心を清らかにし、行いを正しくするほかはありません。」と、開祖さまは説かれています。このことをあなたはどう受け止めますか？

『菩薩摩訶薩、是の如く諦かに觀じて、憐愍の心を生じ大慈悲を發して將に救拔せんと欲し、又復深く一切の諸法に入れ』　（十頁 終三行）

（『諦かに觀じて』―『諦観・たいかん』ものごとの真相を明らかに見極め、正しく考える）　**「抜・ばつ」**という字に注意することが肝要です。ただ一時的に救うのでなく、いわゆる抜本的に、苦しみの原因から根こそぎにしなければ、またいつか苦しみが起こるおそれがあります。それでは本当の救いとはいえません。　（P245・6 行／P174・終 4 行）

『法の相是の如くして是の如き法を生ず。法の相是の如くして是の如き法を住す。法の相是の如くして是の如き法を異す。法の相是の如くして是の如き法を滅す』　（十頁 終行）

四相

（P249・2 行／P177・6 行）

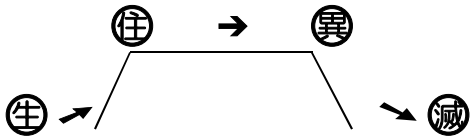
【生 ・住 ・異 ・滅 】

《**生**・しょう》いままでなかった現象が生じること。

《**住**・じゅう》状態がそのまま続くこと。

《**異**・い》異なった状態へ変化すること。

《**滅**・めつ》その現象が消えてなくなること。



ものごとには必ずこの**「四つの相」**があることを知り、その原因・結果を見通し、現在の姿を見て未来を洞察（どうさつ）することのできる人は、どんなことが起ころうと、どういう変化が生じようと、あわてふためくことはありません。それが**「人生の達人」の境地**というものです。

『菩薩是の如く四相の始末を觀察して ～ 一切の諸法は念念に住せず新新に消滅すと觀じ、復即時に生・住・異・滅すと觀ぜよ』　（十一頁 三行）

《思惟のひととき　④》

人は「変化」に遭遇すると、「苦・楽」を覚えます。
「好ましくない、望まない『変化』」には、《苦・憂（うれ）い》を覚え、
一方、「好ましい、望み通りの善い『変化』」には、《楽・喜び》を覚え、ともすると有頂天になって《ぬか喜び》してしまいます。
こうして『変化』に一喜一憂、動揺してしまうのが凡夫だと言えますが、
――　果たして自分はどうであるか？　振り返ってみましょう。

『一切の邪見生死に壊敗せられず』　（十二頁 三行）

（『無量生死（しょうじ）の衆結（しゅけつ）斷（だん）ぜざることなし』　『徳行品』七頁 七行』）

『是の如く觀じ已って衆生の諸の根性欲に入る、性欲無量なるが故に説法無量なり。説法無量なるが故に義も亦無量なり』　（十一頁 五行）

『無量義とは一法より生ず。其の一法とは卽ち無相なり。是の如き無相は相なく、相ならず、相ならずして相なきを名づけて實相とす』　（十一頁 七行）

実 相

（P256・2 行／P182・終 4 行）

ただ一つの**『真理』とは**、～ 無相（特定の相のないもの）であり、～ 一切の「差別」がなく、「差別」をつくらないもの（不相）で、一切の差別をつくらないから、一切が「平等」であり、これを名付けて**『実相』**というのです。

無 相・不 相

（P256・終 2 行／P183・4 行）

《無 相》の「相」というのは、**「差別相」**という意味。差別のある相（すがた）が一切ない、すべて**「平等」**だというのです。
《不 相》というのは、差別的なはたらきをしない。差別をつくらないという意味。

《思惟のひととき　⑤》

『実相』とは、「差別」がなく、「平等」な世界を示すものであると説かれています。しかし日頃の私たちは「差別」、つまり「現象の違い」や他との「比較」に心を奪われ、それによって一喜一憂しているのが現実です。
――　では、私の日々の生活で、この「差別」がなく、「平等」な世界である『実相』を観じ、見ていくためには、どうすれば良いのでしょうか？
具体的にどのようにしていくことが大切か、ちょっと考えてみましょう。

『是の如き眞實の相に安住し已って、發する所の慈悲、明諦にして虚しからず』　（十一頁 終四行）

真実の相（すがた）を悟り、その悟りがすっかり身についてしまった時に起こってくる**「慈悲心」**というものは、はっきりした根拠の上に立った（**「智慧」に基づいた**慈悲心ですので **― 明諦・みょうたい**）でありますから、そのはたらきは、必ず立派な結果となって現われるものです。　(P257・6 行／P184・1 行)

《思惟のひととき　⑥》

この『是の如き眞實の相に安住し已って發する所の慈悲、明諦にして虚しからず』の経文を、―― あなたはどのように受け止めますか？
この経文を、味わってみましょう。

『善男子、是の如き甚深無上大乗無量義經は、文理眞正に尊にして過上なし。三世の諸佛の共に守護したもう所なり』　（十二頁 一行）

【法を聞く者が段々と得ることのできる《境界》】　(P272・終 2 行／P196・2 行)

《煖法・なんぽう》　教義が解らなくても、心が暖まり、いつまでもそばにいたい状態。

《頂法・ちょうぽう》　この法を信ずる者は、凡夫の世界の頂上に立っていることがわかって来る（凡夫のなかでも優れていることがわかる）状態。但し、山の頂上にいるようなもので、山の向こうにも、もと来た道へも後戻りする可能性がある状態。

《忍法・にんぽう》　仏の教えの尊さがハッキリわかって、気持ちが後戻りしない。

《世第一法・せだいいっぽう》　仏法はこの世の第一の教えであるという認識が確かになった状態。仏道に対する理解ができ、信仰心が起こって来た段階にすぎない。

【声聞(しょうもん)の四果(しか)（声聞が段々と得ることのできる《境界》）】　(P208・4 行／P145・8 行)

《須陀洹果・しゅだおんか》　「預流・よる」。仏道の流れに入って、心がその流れに乗った信仰状態。（「教えに沿って行こう！」と思える境界）

《斯陀含果・しだごんか》　「一来・いちらい」。迷いはあらましなくなったけれども、うっかりするとまたもとの凡夫へ戻って来る可能性のある信仰状態。

《阿那含果・あなごんか》　「不還・ふげん」。もう凡夫へ戻って来ないことは確かな境地。

《阿羅漢果・あらかんが》　「殺賊・せつぞく」。心中の賊（我欲）をすっかり滅した状態。あらゆる迷いをすっかり消滅した人で、声聞で最高の境地。

【縁覚(えんがく)の《境界》】　(P209・7 行／P146・6 行)

《辟支仏道・びゃくしぶつどう》　「縁覚処・えんがくしょ」。自分の体験を通じて、仏の道を会得する境地。縁（体験）によって悟る（覚る）のですから〈縁覚〉ともいう。

《思惟のひととき　⑦》

仏の教え、「無量義」の教えをしっかりと受け止める者が、段々と修行を積んでいると、心境が高まって行く順序が説かれています。
《煖法・なんぽう》《頂法・ちょうぼう》（《忍法・にんぽう》）《世第一法・せだいいっぽう》《須陀洹果・しゅだおんか》《斯陀含果・しだごんか》《阿那含果・あなごんか》《阿羅漢果・あらかんが》《辟支仏道・びゃくしぶつどう》・・・。　―― たまに実感できることでも結構です。
あなたが実感できる境地はどのあたりでしょうか？　（たまに、でもOK）

自行化他　自利利他

（P276・6行／P198・8行）

仏と同様の悟りを得ようという願いを起こし、仏の悟りを得るためには、どうしても他を救うという行をしなければならぬことを知って、**自行化他**（自らも修行しつつ他をも教化する）・**自利利他**（自らを高めることによって他をも救う）の菩薩行にうちこもうという決意をする・・・これが**発菩提心**なのであります。

菩薩の十地

（P276・終3行／P198・終4行）

大乘の教えを学ぶ者、菩薩の境地にも十の段階があるというのです。

《第一地・歓喜地 かんぎぢ》　全ては平等の存在であることがわかり、自他一体の気持ちが深まり、大きな喜びが湧いてきた境地。ひとりでに「布施」が成就される。

《第二地・離垢地 りくぢ》　煩悩（垢）の影響からすっかり離れきった境地。煩悩を除きつくした程度でなく、そのあとに残っているかすかな影響までも消滅している。

《第三地・発光地 はっこうぢ》　光を発する境地。その人の存在が周囲を明るくする。その人がいるだけで、ひとりでに周囲が明るく、暖かくなる。

《第四地・焔慧地 えんねぢ》　智慧が、燃え上がる焔（ほのお）のように盛んになった境地。智慧の力が加わり、周囲のもの全てを平等に導いていくことができる

《第五地・極難勝地 ごくなんしょうぢ》　（この境地より勝れていることは極めて難しい）**〈仏道〉**と**〈俗生活〉**が一致する境地。言うこと為すことが自然と仏道と一致するようになる。

《第六地・現前地 げんぜんぢ》　全ての人が平等であることが、現実に目の前に見えてくる境地。全ての人が本質において仏性を持っていることがハッキリ分かる。

《第七地・遠行地 おんぎょうぢ》　自分は悟っているが、他は悟っていないという「二乗根性」からは遠く離れ、差別感がすっかり無くなって自他一体となった境地。

《第八地・不動地 ふどうぢ》　差別が一切なくなり、すべて平等だということが完全に分かり、自由自在に人を導ける状態が不動となった境地。

《第九地・善慧地 ぜんねぢ》　「仏の十力」という十種類の「智慧の力」を完全に具え、どのような人でも必ず救うことができるようになった境界。

《第十地・法雲地 ほううんぢ》　**菩薩としての最高の境地**。大雲が空をおおうように、あらゆる人を救うようになった状態。もうほとんど仏の境地の一歩手前です。

（以上の**「菩薩の十地」**を学ぶと・・・大菩薩の境地が、何と遠く遥かなことか・・・）
まして、仏の悟りなどとは！・・・と、ため息が出そうになります。
しかし、決してがっかりすることではありません。我々の精進は今世だけのものではありません。今世では、ようやく第一地まで登り着くだけでもいい、来世には第二地まで・・・と、常に向上を望んで生きてゆけば、いつかは仏の境地に達することができるのです。それが、**『ほんとうの生き甲斐』**というものであり、**生きる価値**というものなのあります。

《思惟のひととき ⑧》

開祖さまは、「我々の精進は今世だけのものではありません。今世では、ようやく第一地まで登り着くだけでもいい、来世には第二地まで・・・と、常に向上を望んで生きてゆけば、いつかは仏の境地に達することができるのです。それが、『ほんとうの生き甲斐』、生きる価値というもの」だと説かれています。
この『ほんとうの生き甲斐』、生きる価値ということについて考えてみましょう。
（私の毎日の過ごし方は、どうだろう？　そもそも自分の“人生”とは？・・・等々）

四十余年　未顕真実

(P294・3 行／P211・終行)

これは、決して法惜（ほう お）しみをして真実を打ち明けられなかったものでないことは、もちろんです。～ おそばで修行してきた人たちの境地は非常に進んできていることですし、～　ご入滅の近づいたことをも自覚されましたので、いよいよ法の真実のすべて、究極の真理をお説きになるわけです。

『諸の衆生の性欲不同なることを知れり。性欲不同なれば種種に法を説きき。種種に法を説くこと方便力を以てす。四十餘年には未だ眞實を顯さず』　（十四頁 一行）

『善男子、法は譬えば水の能く垢穢を洗うに、若しは井、若しは池、～　水の性は是れ一なれども江・河・井・池・溪・渠・大海、各各別異なり』

（十四頁 四行）

(P297・終 5 行／P214・8 行)

水というものは、どこの水でも汚れを洗い落とす性質を持っています。しかし、そのはたらきは同一ではありません。**（水のはたらきの違い）**

第一の違いは、その**はたらきの量と深さの違い**です。象を洗う時と、着物を洗う時と水の量が違います。～ 教えもやはりそれと同じです。
第二の違いは、**境遇の違い**です。～ 誰でも、その境遇に縁のある教えにまず入ってゆく訳です。そして、それぞれの境遇に応じて、心の垢を洗い落とすのです。

歴劫修行と即身成仏

(P311・終5行／P226・1行)

歴（りゃく）というのは歴る（へる・経る）という意味ですから、**《歴劫(りゃっこう)修行》**とは、「死にかわり生きかわり、長い長い世代にわたって修行をつづける」ということです。～ 仏の境地を求める菩薩はこうあらねばならないのです。～

《即身成仏(そくしん じょうぶつ)》の〈即身〉というのは、**「そのままの身で」**と解さなければなりません。われわれが仏という別な存在に変わるのではなく、**人間であるそのままの身で、仏の境地に達することができる**という意味です。

それには、**どうしても努力が必要**です。修行が必要です。**《歴劫修行(りゃっこう)》**することが必要なのです。

仏教というものは本来は、何かを拝んだり唱えたりすれば、そのまますぐに救われるというような、安易なものではなく、あくまでも**努力主義の教え**なのです。

仏の現われは自由自在

(P318・5行／P231・終7行)

『一切の諸佛は二言あることなく、能く一音を以て普く衆の聲に應じ、能く一身を以て百千萬億那由他無量無數恒河沙の身を示し ～ 』(十六頁 終三行)

いよいよ難しいことになってきました。～ 仏の本体は「ただ一つの宇宙の大真理・大生命」であり、その分身がいろいろ様々な形をとって現われ、いろいろ様々なはたらきや、形式によって、我々を教え、導き、救っていてくださるのだということも、静かに思いをこらしてみると、確かにそうだ ―― と解ってきます。～

特にここで大切なのは、仏がいろいろ様々な身となり、いろいろ様々なはたらきや形式で人を導かれるということです。

（仏は常に仏の形や、宗教家の形をとって世の中に現われるとは限りません。～　その現われは千差万別なのです。）

《思惟のひととき　⑨》

この『一切の諸佛は二言あることなく、能く一音を以て普く衆の聲に應じ、能く一身を以て百千萬億那由他無量無數恒河沙の身を示し ～ 』

「仏が説く真理は二つとなくただ一つしかない。しかしその真理の説き方は、一つではなく様々な説き方がある。同様に、仏の本体もただ一つだが、その現われ方は、様々な『形』となって現れる」。とあります。

――　この経文を、あなたはどのように受け止めますか？

・・・ということは、とりもなおさず、**あなた自身にも、すでに仏の要素がある**ということです。あなたが ～ **ひとのため世のためになるような行為をするならば、その行為の中に『仏のはたらき』が現われているのです。**じっと思いをこらして、このことを

深く心に見定（みさだ）めていただきたいものです。　　（P321・1行／P233・6行）

《思惟（しゆい）のふりかえり　まとめ》

今日の『説法品 第二』を通して、何を学び取られましたか？
そして「何を実践・実行しよう」と思われましたか？
振り返ってみましょう。
（何を一番強く感じ、受け止めることができたか？　具体的に何を実践しようと思ったか？）

合　掌